

《福井市の公民館に思う》



公民館に期待する

元福井市教育委員会教育長 渡辺 本爾

平成 10（1998）年から 3 年間、福井市豊小学校長として勤務したが、学校の教育方針として「地域との連携」を大きな柱として掲げた。公民館の運営審議会に出席すると、いつも「学校の現状」をお話しする機会があってありがたかった。そこで、子どもたちを地域に出かけて行って学ばせたいこと、地域の方が学校へ来て子どもたちを教えてくださいの両方をお願いできたのである。また、『公民館だより』の中にも「学校からのお知らせ」欄を設けてもらったりした。

その後、平成 13（2001）年 4 月から 8 年間、教育長として皆様方のお世話になったが、いつも私の思いの中にあったのは、地域発展の大きな役割を学校と公民館は共に担っているということである。子どもが元気であること、地域の大人が元気であることが一番である。そのための学校であり、公民館なのである。行政は条件整備に取り組むことだと考えた。

学校における学校教育と公民館における社会教育、この両者が相まって子どもから大人まで豊かな学びが生まれ、個人が地域が市全体が豊かな生活を創出できるのである。今日は生涯学習の時代である。まさに子どもから大人までなのだが、それぞれの学校が特色ある学校教育を目指すのと同じように、それぞれの公民館も特色ある社会教育・生涯学習を創造しているのである。全国的には、公民館よりコミュニティセンターへという主張もあるが、福井市の公民館はその始まりから社会教育・生涯学習を基本にして、市民力の向上にひたすら地道な努力を重ねてきたのである。

勿論、まちづくり・地域づくりという地域コミュニティの発展、活性化のために、公民館の果たす役割は大きく一層重要になっていることも事実である。少子高齢化の時代、地域コミュニティの衰退から脱却するため、様々な工夫や取組がなされている。その中核としても公民館は存在しているのである。一つ地区行事を取ってみても、その企画・運営・実施全てに公民館に集う個人や団体の力が結集するのである。それは、一地域の話ではなく福井市発展の原点なのではなかろうか。

公民館は、不思議な存在である。よく福井市の公民館は半官半民型だと言うが、個人と個人をつなぎ団体と団体をつなぎ地域と行政をつなぎ地域と地域をつなぐ。公民館長や主事さん方の努力によって、公民館が架け橋となりつなぎ役となり、輪（和）づくりの中心（核）となって、地域を一つにまとめていく。1 小学校区に 1 館体制という、きめ細かな配置を生かして網目のように生き生きとした人々の絆が生まれる。

まとめれば、我が福井市の公民館は、①人々の教育を重視し ②まちづくり・地域づくりを推進し ③行政と地域を一体化して 福井市発展の中心的な役割を担って、日々切磋琢磨していると言えるのである。その期待するところは益々もって大なのである。